

家内のためを選んだホームで、今は好きなことに没頭できる幸せ

浜松〈ゆうゆうの里〉

小松田孝雄様（84歳）平成15年9月 夫婦入居

家内が私の世界を広げてくれた

東京大空襲で焼け出されて身を寄せた秋田、山形から、父とともに静岡県富士市に引っ越しました。そこからは両親が揃った生活が始まりました。私は中学を卒業して就職すると、社宅住まいをして板金工になりました。以来44年、定年までずっと同じ会社で働き続けました。家内とはお見合いです。35歳の頃、念願の自宅を建てま

した。家内はマメな主婦で、着物を縫つたり、フランス刺繡の内職をしていました。編み物や針仕事

も好きでした。休みには二人、車で買い物や家の母に会いに行ったりして過ごしました。家内はね、曲がったことが嫌いではつきりした性格でした。優柔不断な私は「この人の後に付いて行けば間違いないな」って思つたりしました。また家内は社交家でいつも人に囲まれていました。私は家内と一緒に歩いたお陰で世界が広がつたと感謝しています。

全ては家内のためのホーム選び

私達が50代後半、登山好きで健脚な家内がほんの小さな山に登れない事がありました。あれ、おかしいなと思いました。今考えるとパーキンソン症候群の症状がその頃から出ていたんですね。60歳で私が定年を迎えると、家内は「老人ホームを探そう」と言い出しました。医療と介護の安心が欲しかったんです。ここは何より病院が近いし、緑に囲まれていると

ころが気に入りました。入居を決めた時は、家内のことを第一に考えていたので、自分のことは全く考えにありませんでした。こちらに持ってきた荷物は、ほとんどが家の衣類や趣味の物。とにかく家内が「やりたい」と思う事を何でも叶えてあげたいと思ったのです。

入居して18年になります。家内がいた頃は病の進行を防ぐため、彼女は施設内の散歩を日課にしていました。家内が散歩する時間は、私は施設の外で長い距離を歩きました。歩けなくなつてからの家内は、味気ない天井を見ていたので、少しでも気持ちが明るくなるように天井を折り紙で飾りました。折り紙に興味を持ったのはそれからです。

料理の楽しみ、待つている仲間と分け合う楽しみ

私は昔から料理も好きでした。若い頃働きながら調理専門学校に通い、調理師の免許も取得しています。シルバークッキングスクールにも通いました。今は、あの頃習ったことを応用したり、本やテレビを参考にしたりして作りたいものを作っています。その時に食品棚にある材料から想像を巡らせて「あれを入れてみよう、これはどうかな?」と工夫する面白みがあります。私が作つたお菓子やパンを楽しみに待つている仲間もいて、いつも分け合つて食べてもらっています。その時に「おいしい」と言つてもらえることが、次の励みになっています。

ここには職員さんがいるという安心感があります。安心して一人の時間を楽しみながら、人と会話をする楽しみもここにはあるのですね。



お菓子製作中の小松田様とお手製「栗とピスタチオのケーキ」



作っている時はあつという間に時間が経ちます。幸せですね。最近は職員さんの計いで、月に2回折り紙好きの仲間が集まって一緒に作るようになりました。忙しくなりましたが、最近では、仲間と一緒に作るのもいいなあと思っています。現在、ケアセンターに飾る切り絵を製作中です。定期的に新作を飾らせてもらっています。